

チャペル週報

No.6

2022.5.23～5.27

いかに美しいことか／山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は。
彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え／救いを告げ／あなたの神は
王となられた、と／シオンに向かって呼ばわる。

(イザヤ書 52章7節)



時計台 (西宮上ヶ原キャンパス)

<春季宗教運動特集号>

関西学院宗教センター

ポストコロナ時代における“Mastery for Service”

中道 基夫

2020年以降、私たちはこれまで経験したことがない世界的な危機を経験しています。学校の休校、さまざまな催し物の中止、都市のロックダウン、多くの人々の死が連日報じられてきました。その中で、人類は大きなチャレンジを突きつけられ、世界はどう変わるのか、私たちの生活はどうなるのかという問いに直面しています。

しかし、このような危機は決して予想もしていない、新しいものではなく、すでに私たちのまわりに潜んでいたことが新型コロナウイルス感染症によって顕在化しただけなのかもしれません。砂が篩（ふるい）に掛けられ、砂の中に隠れていた小石があらわになるように、パンデミックという篩によって、現代社会の問題があらわになったと言えます。

ローマ・カトリック教会のフランシスコ教皇は、新型コロナウイルスだけではなく、「無関係というウイルス」が社会にまん延していると指摘しています。日本赤十字社は、「不安」「差別」という感染症のまん延防止を訴えています。無関係、無関心、不安、差別は、何も新しいものではありません。そして、これらのものは、貧困や暴力、気候変動というパンデミックとも繋がっていますが、実感されず、また報道されないため隠れています。顕微鏡でも見ることができないこれらの感染症を見抜く目、そしてそれを阻止するワクチンが必要です。

第4代ベーツ院長は、110年前の1912年に、関西学院のスクールモットーである“Mastery for Service”を提唱されました。わたしは、この“Mastery for Service”という謎に満ちた17文字に、大きな力を見えています。‘Master’（主人）でありつつ、‘Servant’（僕）である。聖書の「いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい」（マタイ20：27）という言葉は、単に謙虚さを美德とする処世術ではなく、神の子が人間になられたというキリスト教の神秘を表現するものです。この相矛盾するものをひとつにするのが、聖書に示されている愛です。この愛が、私たちにとって必要な「いのちのワクチン」です。

（院長）

関西学院に吹く風—自由と愛のスピリット

打樋 啓史

今回の主題は「建学の精神」、つまり関西学院がそれを土台にして創立され、ずっと大切にしてきた「スピリット」のことで、関西学院ではこのスピリットに根差して教育が行なわれ、学生たちの様々な活動もこのスピリットに基づいて展開されています。そこに他の学校とは違う「関学らしさ」が表れていると言えるでしょう。英語の「スピリット（精神・霊）」は、元は「風」や「息」を意味する、聖書のヘブライ語「ルアハ」に由来します。風や息が目に見えなくても何かを動かすように、スピリットも目に見えないけれど人を動かす力だという理解がここに見られます。聖書によると、スピリットとは「神の息吹、神から吹いて来る風」であり、人の心を動かし、行動へと促し、何かを生み出す力なのです。

「関西学院のスピリット」とは、静止した言葉ではなく、これまで学院に連なってきた人々の心を動かしてきたダイナミックな力、学院の歴史を通して力強く吹き続けてきた「神様からの風」のことで、上ヶ原キャンパスは山の麓にあるので風がよく吹きます。校歌「空の翼」では、「風、光、力」というように、キャンパスを特徴づけるイメージとして最初に「風」が出てきます。この自然の風に、今日まで吹いてきた関西学院のスピリットとしての風を重ねてください。ここで学ぶ皆さんは、日々学院に吹くその風によって心を動かされ、励まされ、新しい一歩を踏み出していくのです。

それはどのような風でしょうか。19世紀にキリスト教の宣教師によって創立された関西学院は、それ以来キリスト教的価値観に基づく教育を行ってきました。キリスト教的価値観の中心は、「自由と愛」だと言えます。「このままの私が神に愛されている。だから安心していい」という自由。その安心感のもと、自分自身で考え、行動できる自由。そして、他者の痛みが分かり、そのために自分をまいりようとする愛。「好き」という感情ではなく、共生への意志と行動としての愛。このような自由と愛こそ、人間にとって最も価値あるものだというのがキリスト教の中心であり、それが関西学院のスピリットの核になるものです。スクールモットー“Mastery for Service”もこの考えに基づいています。“Mastery”（自由に基づく成長）は“Service”（愛に基づく奉仕）を目指すもの、それでこそ意味があるということ。ここに、関西学院が重ねてきたユニークな価値観があり、それは皆さんの人生を真の意味で豊かにしてくれるでしょう。今日という日を、関西学院に吹く風、自由と愛のスピリットを身に受けて、歩み出してください。

（宗教総主事）

関西学院と校歌—歌い継がれる建学の精神

嶺重 淑

関西学院には四つの校歌があるが、こんな学校は非常に珍しい。しかも、その一つ一つの校歌が学院のこれまでの歩みと密接に結びついており、学校の歴史を語る上で欠かすことのできないものばかりである。最初の校歌“OLD KWANSEI”は、アメリカのプリンストン大学のカレッジソング“Old Nassau”の歌詞の一部を変更したものであったが、学院創立 10 年後の 1899 年に日本最古の男声合唱団として誕生したグリークラブによって翌 1900 年の秋の英語会（英語文芸大会）で初めて演奏された。

その後、学院は 1929 年に上ヶ原に移転し、1932 年に念願の大学設立が認可されることになるが、これを機に、日本語で歌える独自の校歌を待望する声が一気に強まることになる。そして翌 1933 年に、北原白秋の作詞、同窓の山田耕筰の作曲により、新しい校歌「空の翼」が誕生することになった。

ところが、せっかく待望の校歌が誕生したにもかかわらず、「空の翼」は数年後には歌われなくなってしまう。当時の日本はすでに戦時体制への道を歩み始めており、「輝く自由」や“Mastery for Service”等の歌詞が問題視され、公に歌うことが憚られるようになったためである。そして戦争の気配が強まってきた 1939 年に「第二校歌」として知られる「緑濃き甲山」（由木康作詞、山田耕筰作曲）が作られる。この校歌は、躍動感に溢れる「空の翼」とは対照的に静寂で美しいメロディーの曲であるが、まさに「暗き世に絶えず光をおくる」と歌われているように、学院が暗い戦争の時代を生き抜いてきたことの貴重な証しとなっている。そして終戦後の 1949 年、創立 60 周年を記念して四つ目の校歌となる“A Song for Kwansei”（エドモンド・ブランデン作詞、山田耕筰作曲）が作られた。

このように、いずれの校歌も学院が歩んで来た時代の空気を伝えており、その時々学院の姿を歌いあげている。今、学院は創立 150 周年に向けて新たな歩みを進めているが、これからもこれらの校歌を通して学院の建学の精神がしっかりと受け継がれていくことを心から願いたい。

（大学宗教主事）

「二重の任務(The Twofold Task)」のエートスを受け継いで

村田 治

ウォルター・R・ランバスのご著書『医療宣教 二重の任務』が2016年4月に関西学院出版会から発行されました。ご存知のように、宣教師であり医者でもあったランバス先生は、二つの役割を担って日本やアジアで活動されていました。キリスト教の宣教と医師という科学的な行為の双方を体現されていたこととなります。

この精神は、後の関西学院憲法に受け継がれ、第2款において「本学院ノ目的ハ、基督教ノ伝道ニ従事セントスル者ヲ養成シ、基督教ノ主義ニ拠リテ日本青年ニ知徳兼備ノ教育ヲ授クルニアリ」と定められています。特に、知徳兼備について英語では、intellectual and religious と表現されており、知性（科学的精神）と宗教性（キリスト教）を意味していると考えられます。さらに、1929年に神戸原田の森から上ヶ原へのキャンパス移転に際しても、この考え方が貫かれています。当時から、上ヶ原キャンパスの中央芝生を中心に、時計台に向かって右側には神学部と文学部が、左側には高等商学部というように、キャンパスの右側が宗教性、左側が知性というように二つに役割を分けながら、キャンパスの象徴である時計台で二つの役割を統合するという設計思想が貫かれていました。このように、ランバス先生の「二重の任務」のエートスは、関西学院憲法や上ヶ原キャンパスの設計に受け継がれてきました。

この精神は、2014年に採択された本学のSGU(スーパーグローバル大学)構想にも反映されています。本学のSGU構想の基本的な教育OSの一つに「ダブルチャレンジ制度」があります。専門分野以外に、海外での学び、学外での学び、他分野の学びのいずれかにチャレンジさせるという制度です。この背景には、独創性やイノベーションは異なった領域の知識や知恵が結合するときにはしか生まれないという考え方があります。アイザック・アシモフやスティーブ・ジョブズも言っていますように、異なった分野の出会いや融合こそが、イノベーションや創造性を生み出す源泉であると考えます。このように、ランバス先生の「二重の任務(The Twofold Task)」の精神は、現在ではイノベーションを生み出すのに必要不可欠なものとなっています。私たちは、創設者ランバス先生の「二重の任務(The Twofold Task)」のエートスを無意識のうちに受け継いでいるのではないのでしょうか。

(学長)

世の光として生きる－Mastery for Service

細見 和志

関西学院のスクールモットー「Mastery for Service」は一見すると矛盾する意味を持った二つの言葉から成り立っています。この言葉を提唱された関西学院第4代院長、ベーツ先生によると、「Mastery」とは「自己修養 (self-culture)」を意味します。自己の独立を保ち、知識と教養を身につけて、自分自身を抑制できる人物になることです。もうひとつの「Service」とは、「献身 (self-sacrifice)」です。公共的な利益や社会の幸福のために、自分が蓄えた知識や財力を自ら進んで使えるような人物、つまり社会的義務の感覚を身につけた人物になることです。

前者は「個人の自由」の尊さを、後者は「自己犠牲」の大切さを説く言葉です。自由と自己犠牲とは一見相容れないように見えます。個人の自由にとって大切なのは、独立した自己の内面です。他者よりも自己が優先されます。しかし一方、自己犠牲は、他者と共に生きている自己を自覚し、自己よりも他者を生かそうとする精神です。

ベーツ先生は、この相矛盾する二つの言葉を「for」という小さな前置詞を介して一つにまとめ上げました。それが「Mastery for Service」です。「Mastery」だけでは、自己本位な人間になる可能性があります。一方「Service」だけでは、自律性のない人間が生まれるでしょう。まずしっかり学び、個人の独立と自由を手に入れなさい。しかしそれは社会に希望の光を灯すためなのだ。これが、関西学院の建学の精神です。

「マタイによる福音書」5章14節～16節に「あなたがたは世の光である。(中略)あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。」というイエス様の言葉があります。これは、暗き世の中に希望の光を灯しなさい、という神様からの人間への委託です。

しかし、私たち自身が輝く光なのではありません。月が太陽の光に照らされて光輝くように、私たちが世の光でありうるのは、常に神様によって照らされているから、生かされているからです。世の中に希望の光をもたらすということは、神様から与えられた光を世の中に返しているだけなのです。私たちにはなにも誇ることはありません。

鏡がライトの光を受けて部屋を照らすように、私たちは神様から受けた光で世の中を照らすだけです。ただその場合、鏡が曇っていては役に立ちません。鏡は磨かなければ光を十分に反射できないでしょう。それと同じように、私たちもまた自己を磨き、神の光を反射できるようにならなければなりません。そのために Mastery が必要なのです。

(総合政策学部教授)

チャペルアワー スケジュール

西宮上ヶ原キャンパス、西宮聖和キャンパス・・・10:30-11:00
神戸三田キャンパス・・・10:40-11:10

5/23 月

神 ウェスレー回心記念礼拝 水野 隆一（神学部教授）
経 大学キリスト教週間を迎えて 李 相勲（宣教師）
人 中野 陽子（人間福祉学部教授）
建 井上 智（宗教センター宗教主事）
聖和 波田埜クラス・ダッドレーチャペル

24 火

大学合同チャペル「総主題：建学の精神」
西宮上ヶ原キャンパス（10:20-11:10）会場：中央講堂
「関西学院に吹く風—自由と愛のスピリット」
打樋 啓史（宗教総主事）
神戸三田キャンパス（10:30-11:20）会場：VI号館101教室
「ポストコロナ時代における“Mastery for Service”」
中道 基夫（院長）
西宮聖和キャンパス（10:20-11:10）会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
「関西学院と校歌—歌い継がれる建学の精神」
嶺重 淑（大学宗教主事）

25 水

大学合同チャペル「総主題：建学の精神」 10:20-11:10 (NUC, NSC) 10:30-11:20 (KSC)
西宮上ヶ原キャンパス（10:20-11:10）会場：中央講堂
「ポストコロナ時代における“Mastery for Service”」
中道 基夫（院長）
神戸三田キャンパス（10:30-11:20）会場：VI号館101教室
「世の光として生きる—Mastery for Service」
細見 和志（総合政策学部教授）
西宮聖和キャンパス（10:20-11:10）会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
「『二重の任務』のエートスを受け継いで」
村田 治（学長）

26 木

神 昇天日礼拝 井上 智（神学部助教）
文 Andreas Rusterholz（宗教主事）
社 私にとっての「関西学院」⑥ 荻野 昌弘（社会学部教授）
法 大宮 有博（宗教主事）
経 昇天日を覚えて 舟木 讓（宗教主事）
商 木原 桂二（宗教主事）
人 甲斐 智彦（人間福祉学部教授）
国 Chapel in English Eun Ja Lee（宣教師）
総 寿賀 素子（三田市国際交流協会 副会長）
聖和 聖和創立記念を覚えて / 森本 宮仁子（非常勤講師）

27 金

神 安田 典子（神学研究科 D3）
文 English Chapel Andreas Rusterholz（宗教主事）
経 李 相勲（宣教師）
院 昇天日を覚えて 井上 智（宗教センター宗教主事）
理・工・生環 藤原 伸介（生命環境学部長）

◇ランバス早天祈祷会 毎週金曜日 8:10~8:30 ランバス記念礼拝堂(西宮上ヶ原)
5月27日(金) 社会学部のために 森 康俊(社会学部長)
Zoomでご参加希望の教職員・学生の方は、宗教センター(shukyocenter@kwansei.ac.jp)へ
①メールアドレス②お名前③所属④関学との関係(学生等)をメールでお知らせください。

●大阪梅田キャンパスチャペル

阪急大阪梅田駅から徒歩すぐ、アプローズタワー14階の大阪梅田キャンパスでは、大学院授業期間中の毎週木曜日にチャペルアワーを開催しています。

【どなたでもご自由にご参加ください。】(17:50~18:20 1405教室)

5月主題:平和を求めて

5月26日(木) 打樋啓史(宗教総主事)

6月主題:日常と非日常ーコロナ禍での気づき

6月 2日(木) 嶺重 淑(大学宗教主事)

6月 9日(木) 井上 智(宗教センター宗教主事)

●ランバスチャペル・ヌーンコンサート

西宮上ヶ原キャンパスの正門を入れて右手に見えるチャペル「ランバス記念礼拝堂」では、恒例のヌーンコンサートが開かれています。お昼休みのひととき、どうぞ耳を傾けてみてください。

5月26日(木) 関西学院大学混声合唱団エゴラド

5月27日(金) 関西学院大学応援団総部吹奏楽部

6月23日(木) 関西学院ハンドベルクワイア

6月30日(木) 関西学院ウィメンズ・グリークラブ

7月 7日(木) 関西学院交響楽団(管楽アンサンブル)

7月 8日(金) 関西学院交響楽団(弦楽アンサンブル)

7月15日(金) 関西学院聖歌隊

いずれも12時45分~13時15分

ところ:ランバス記念礼拝堂(西宮上ヶ原キャンパス)

主催:宗教センター・宗教音楽委員会

●関西学院会館ベーツチャペル日曜礼拝

授業期間中、第二・第四(原則)日曜日の午前10時から関西学院会館ベーツチャペルでは日曜礼拝を行っております。どなたでも(クリスチャンでなくとも)ご参加できますのでどうぞお越しください。

6月12日(日) 10:00~11:00

6月26日(日) 10:00~11:00

●ボランティアに関心がある皆さんへ(ヒューマン・サービス支援室からお知らせ)

単発のボランティアや継続して関わるボランティア団体・サークルの紹介をしています。

[相談予約・お問い合わせフォーム]

個別にボランティアの紹介や相談対応をしています。

<https://onl.tw/UBvnyqX>

[春のボランティア情報誌『春ボラ』]

https://www2.kwansei.ac.jp/kwansei_c_volunteer/2022/

関西学院宗教センター

<https://www.kwansei.ac.jp/about/chapel/>

